

## 翼への憧れ―国を背負った17歳

広田 渡 鹿沼市

### ●竹ひごの飛行機

小学校高学年のころ、町に出て模型店から当時としては珍しかった竹ヒゴ模型飛行機を買い求めました。自分で組み立て、ワインダーでゴムをいっばいによじって空へ放り上げると、よじったゴムの力でプロペラが回り、調子のよい時は4〜5分くらい飛ばし続けることができました。その頃から空への憧れがあつたのかもしれませんが。部屋に飾って眺めては、よい気分になっていました。また、当時の東京日日新聞の小学生綴り方に『大空は吾が墳墓』と題して投稿したら、掲載されたことを思い出します。

県立鹿沼農商高等学校に通学していた当時、学校へグライダーが2機配置されていて、おもに上級生が乗っていたのを、私は大変興味深く見ていました。

そんなおり、学校の上空を宇都宮飛行学校壬生分校の練習機が飛んでいました。ちょうど場周飛行の旋回地点にあつていたようでした。それを見上げては、俺も飛行兵になって大空を飛んでみたら、どんなに素晴らしいだろうな、と憧れていました。

### ●16歳の志願

その頃、役場の掲示板には「来たれ若人よ、大空へ」という陸軍の飛行兵募集のビラが貼られていました。大東亜戦争（太平洋戦争）が苛烈を極め、兵力の増大のため、航空兵養成の必要性が高まってきていたのです。

大空への憧れがあつた私ですから、志願する意志を固めるのに時間はかかりませんでした。7月、各県ごとに学科試験、体力、身体検査などの試験を経て選抜されることになり、幸いにも「合格した」と、役場の兵事係がその通知を届けてくれました。なかなかの難関だったので、校長以下、学校中全員に祝福され、激励を受けたものです。

昭和18年9月、村山（現・東京武蔵村山市）の東京村山陸軍少年飛行兵学校に仮入校しました。4日間、各種の適性検査を受け、そこで操縦、整備、通信と分別され、幸いにも私は操縦となり、大刀洗（たちあらい）飛行入校を命ぜられました。九州の福岡県大刀洗にあつた大刀洗陸軍飛行学校の甘木生徒隊に晴れて入校し、2000名の一員となったわけです。

ここでは校庭と近くの筑後川の河川敷を利用して滑空機訓練を受け、大空への第一歩を踏み出しました。16歳でした。

### ●一生忘れえぬ感激の瞬間



飛行服姿で

やがて生徒教育が終わり、宮崎県の本脇教育隊に配属になって、

我々は陸軍生徒の身分から上等兵に進級、正規の軍人になりました。憧れの飛行服も支給され、飛行兵の姿になったのでした。

ここでは飛行機の基本操縦教育を受けることになりました。夢にまで見た憧れの飛行機に乗れるのです。機種は九五式一型練習機（通称：赤トンボ 写真）。地上滑走からはじめ、次に慣熟飛行、離着陸飛行と進んでいきます。

慣熟飛行で初めて大空を飛んだときの興奮は忘れられません。一瞬の恐怖はあつたものの、下界を見下ろすと、神社の森、菜の花畑、緑の麦畑、苗代田、帯状の川が蛇行し、まるで箱庭を見ているようで、美しいことはこの上もありません。

離着陸の訓練に移ってくると、わずか4か月で基本操縦の技術を習得せねばならないという軍からの至上命令があるので、教育にも熱がこもってきました。（大東亜戦争初期に多くのパイロットを失い、我々のような少年を促成教育しなければならなかった）教える側、習う側、ともに真剣



一式双発高等練習機 (写真: ウイキメディア・コモンズより)

そのもの、1分1秒たりとも心の散漫は許されません。搭乗中は夢中でしたが、地上に降りると全身汗まみれの興奮状態で、気力、体力の消耗も激しいものでした。

そんな猛練習が続き、8、9時間でも後れを取るまいとしたが、心は焦るばかり。技量は一進一退の繰り返しで、一心不乱の練習の日が続きました。

そんなある日、区隊長の同乗で離着陸飛行を試験し、その所見を受けるため、安全ベルトを脱しかけると、区隊長は「単独に行つて来い」と言うのです。一瞬耳を疑いましたが、機外でも私の操縦を見ていたのだらうと思います。早くも整備員が翼支柱に赤い吹き流し(初心者マーク)を取り付ける準備にかかりはじめました。今まで単独飛行を目標に、全身を打ち込んで訓練に励んできたので、天にも昇る喜びでした。操縦桿を握ったことのある者なら、誰しもが味わう喜びのひと時で、

生涯忘れられない経験です。

ちょうどその日は風も少なく、快晴の飛行日和でした。準備線に機を進め、発着点検をします。「スイッチ、コックよし、調整レバー全開、計器よし、警戒よし、出発!」と声を力いっぱい出し、発着係に目をやり、手を前後に振って発進の意志を伝えます。ガスレバーを徐々に開き、地上滑走に入り、機を加速する…。ついに浮き上がった! みるみる高度が上がリ、第一旋回から第二旋回へと茶畑の上を上昇していきましました。高度300メートルとなり、水平飛行に移したところで、張り詰めた緊張から我に返ったのですが、それでも落ち着かないので、大声で軍歌を歌ったことを記憶しています。

いままでのように前座席に助教がいて、伝声管から操作要領の音が聞こえてくることはありません。心細い思いを沈め、第三旋回を回り、いよいよ着陸態勢に入ります。徐々に高度を下げながら飛行場に侵入、第四旋回を慎重に機首を滑走路に向け、レバーを静かに絞ります。高度10メートルで静かに機首を上げながら着陸操作をして三点着陸で接地しました。

「やったぞ!」と嬉しくてしかたがありません。地上滑走をして機を駐機場に運び、ピストにいる区隊長のところに行く足、なんと軽かったこと

か。「石川(旧姓)上等兵、単独飛行終わり! 異常なし!」と搭乗報告をしました。これが思い出に残る若い日の一生忘れえぬ、緊張しながらも爽やかな単独飛行の一コマです。

### ●戦艦「榛名」でマレーに転属

以来、離着陸演習が続き、計器飛行、特殊飛行、編隊飛行と進んだ頃に、性格や技能、本人の希望に基づいて将来の進路が発表になりました。戦闘、偵察(軍部偵察、総司令部偵察)、爆撃(重爆、軽爆)という分科です。誰しも華々しい戦闘機乗りを希望していましたが、私は性格がおとなしいせいか司令部偵察(司偵)になり、離着陸、計器飛行、航法等に重点を置く演習が続きましました。

かくて4か月の基本操縦教育が終了して大刀洗校を卒業し、そして多くの仲間とフィリピン、マレー、台湾、朝鮮、ジャワ島の新任地に転属するため、別れ別れになりました。

私はマレーの46飛行隊に転属を命ぜられ、佐世保軍港より華やかな軍楽隊に見送られて、あの戦艦「榛名」2万5千トに乗船しました。巡洋艦や駆逐艦を従えて船団を組んでの出航に、晴れがましい気持ちでいっぱいでした。

大海原に出ると、見渡す限りの海、海、海: 船酔いに苦しみました。台湾沖、東シナ海、南シナ海を航海し、ベトナムの南に差しかけると敵の魚

雷が水煙を上げて飛んできて、さすがに恐怖を憶えませんでした。榛名の巨体では直進すれば命中してしまうので、蛇行しながら航行したり、湾に逃げ込んだりしながら難を逃れました。

そういえば、以前戦友会があった時、後から昭南島（シンガポール）の南方を目指して輸送船で航行していた同級生たちのことを聞きました。ベトナムのサンジャック沖まで来たとき、魚雷にやられて大半が海中に沈み、ひき上げられて船の甲板にいた者は機銃掃射でやられてしまったと、生き残った者から悲惨だった戦況を聞き、胸が痛みました。

何とか無事にセレーター軍港（シンガポール）に着き、一泊した後マレーを北上して、かつて日本とイギリスとの激闘があった戦場跡を貨車で通過し、ゴム林に囲まれた飛行場に到着しました。そこは元はイギリス軍の飛行場でした。

46教育隊は一区隊大刀洗飛行学校出身の十五期生、二区隊は宇都宮飛行学校出身の十五期生、計百十名で構成され、一式双発高等練習機（双練）の操縦教育を受けます。さっそく訓練が開始されましたが、中錬とは違い双練の大きさに驚きました。が、将来は新司偵に乗れるんだと思うと、希望にあふれ、意気を盛り上げて基本操縦訓練を受けることができたのです。

単独飛行は生徒4名が乗り、交替しながら飛行しました。基本操縦教育が終わり、隊は24錬成飛行隊と改称し、引き続きいて航法偵察の実技を学び、マレーの上空はほとんど飛びました。

仲間だけの4人の飛行は楽しかったが、山間部にゲリラが出没して、夜間は通信連絡でのろしを上げて交信していたのを見ることがあります。夜間飛行は現在のような頼りになる機器はないので、操縦は難しかったです。

ちょうどその頃、成績優秀組は特攻要員としての命令を受け、第一陣として内地に帰った者がありました。というわけで、実践機となる新司偵操縦は夢となってしまったわけです。

#### ●「特攻」という消耗品に

間もなく、昭和20年1月、ついにわれわれ全員に特攻要員の命令が下りました。双発機から単発機に変更を余儀なくされ、九十九高等練習機と直協による操縦訓練と合わせて、突っ込みの訓練に明け暮れる日々が続きました。間断、隙のない発着の教育を短時間で済ませ、センバワン飛行隊（シンガポール）に特攻要員として集結させられたのです。病人の輸送を装って病院船に乗って移動する予定でしたが、スパイがいて発覚してしまい、待機して待つことになりました。

中錬時代から助教連中に、「貴様らは消耗品だ」

と聞かされてはいましたが、この頃、すでに沖縄では死闘が繰り広げられようとしていたので、なるほど、と思うようになりました。「と号作戦」とか、「北方圈要員」とか言われていましたが、移動はままならぬ戦況下で、昭南島（シンガポール）のことで待機していたというわけです。つまり、再び操縦桿を握る機会を失ったわけです。一般兵のように、戦車攻撃や切込み隊のような演習をやっているうちに沖縄の激闘があり、終戦を迎えたのでした。

終戦間際、新型爆弾（原子爆弾）が日本に投下されたとの情報が入りました。そして、終戦の天皇の放送があり、近親の殿下や軍の高官を各地に派遣されました。戦地の軍司令官に対し、血気にはやらず行動するようにと勅使を出したのです。私はカワン飛行場に来た福富中將を記憶しています。

#### ●捕虜となって

やがてイギリス軍が上陸して日本軍の武装解除をしました。私たちは帯剣、軍刀、小銃を差出しました。聞くところによると、それらはみんな海の中に捨てられたとか。

昭南島には日本軍がかなりおりました。ジョホール水道を渡りマレー半島に移動する者、昭南島の南にある小島（無人島）に移動する者、私を含

めた昭南島で作業をする残留組など、24時間以内に移動するよう命令され、いままで一緒だった同期生と離ればなれになりました。

我々残留組とマレー半島北上組は少しはましだったが、レンバンという無人島に行った者たちはひどい目に遭ったと、後で戦友会で生々しい惨状を知らされました。無人島ですから、原始生活をはじめなければなりません。食糧はなし、医薬品もなし。熱帯の高温下で栄養失調、チフス、赤痢、マラリアなどの病気が発生してもなすすべもなく、死者続出。目を覆いたくなる状況に、さすがにイギリス軍は優先的に復員させた、ということです。

私たちは昭南島のチャンギー飛行場の近くにバラック兵舎を作り、作業隊として毎日、50名ほど日産のトラックに乗せられて島の各地に出かけました。飛行場滑走路建設など、赤道直下の炎熱燃える中での作業は、体中から塩が噴き出しました。ほかにも、港に行つて船からの荷揚げ作業、市内清掃、シンガポール攻略戦での大激戦があったブキマ高地では、そのとき塹壕に埋めた死体の掘り出し作業等々、重労働の連続でした。

作業の行き帰りに支那人街を通つたとき、二階の窓から「日本人のバカヤロー！」と罵声を浴びせられ、悔しい思いをしたこともありました。

何といつても毎日空腹の日々が続き辛かった。一日千秋の思いで帰国を夢見ました。

捕虜生活で当時の英軍インド兵、豪州兵、支那人等に間近に接し感じたことですが、教養のない者が目につきました。日本人は明治以降教育に対して力を入れてきましたので、日本民族は優秀な国民だと思いました。

#### ●鹿沼に帰る

昭南島捕虜収容所で約1年の労役に服し、昭和21年6月、復員命令が下りました。私は作業隊の作業は1日も休まなかつた成績良好だったので、第一隊として英国の貨物船リバティにて帰国しました。和歌山県田辺港に上陸し、日本の土を踏んだのです。

我が家に帰り、母と再会したことが何より嬉しかった。畑で仕事をしていた母は私の顔を見て、信じられないという驚きの表情をしました。

ちなみに、私は6人兄弟でした。昭和19年、長兄は33歳で召集され、老母、妻子を置いて満州の部隊へ。後にシベリアに抑留され病死。次兄は満州チチハルにて在満国民学校（小学校）の教員、引き揚げ者として命からがら帰国。三兄もハルピンの学校教員であったのが、現地召集でシベリアに抑留され、3年後帰国（シベリアで長兄と奇跡的に出会う。過酷な労働、飢え、寒さのため病死

した兄を自ら埋葬）。四兄はニューギニアの激戦で戦死しました。姉は学校教員として国内に、末っ子の私がマレーシアから生還したというわけです。

#### ●その後―永遠の平和を望みます

その後農業を営み、現在に至っています。あるときの戦友会で、数人とジャワ旅行に出かける相談が決まりました。

まず、同行者の飛行隊があつたカリジャチに行き、日本人兵士の墓参をしました。現在、インドネシアのヘリコプター基地になっているので、司令官を表敬訪問し、その他、民間外交などをして4日間旅してまいりました。インドネシアの人々は日本のおかげで独立できたと親日的でした。

栃木県では当時、飛行機を操縦した者は今では数えるくらい少なくなっています。鹿沼市では宮本輝一さんと私の2人です。2人で当時を語るころとがあります。「弱冠17歳であの大きいプロペラ飛行機を乗り回したのだ、よくやったよ」と、お互い感心しております。

毎日飛行機の操縦をしていて、事故で死亡することも覚悟の訓練でした。訓練中の事故で一緒に学んだ戦友と助教が墜落死亡。夜間飛行着陸失敗し死亡。枕を並べた友も特攻出兵し散華。いつ我

が身に降りかかってくるおかしくない死線を  
乗り越えて生還し、しかも幸運にも86歳の高齢ま  
で長い生涯を送ることができています。

限りなく尊い犠牲が出る戦争は、どんなことが  
あっても、絶対に許されません。永遠平和である  
よう、みんなが努力すべきだと強く訴えたいです。